

7 指宿の特色を活かした畜産産地育成

畜産産地の育成

成果の要約

- 1 指宿地域の肉用牛生産基盤の維持・拡大へ向け、個別経営体支援で規模拡大2件、新規就農1件で延べ90頭の増頭計画につながった。また、新たに2戸が簿記記帳に取り組んだ。
- 2 飼養管理技術の向上で、重点対象者の子牛増体量が1.10kgを達成した。また、行動観察畜産ICTの導入実証で繁殖成績が向上した。

1 対象

- (1) JAいぶすき各地区生産牛部会員 76戸

2 課題を取り上げた理由

- (1) 指宿地区においても、県内他産地と同様に高齢化や後継者不足により、肉用牛生産者個数の減少が続いている。

一方、繁殖めす牛数は、平成26年まで減少していたが、関係機関一体となった増頭推進の結果、増加傾向に転じている。今後も肉用牛生産基盤の維持・拡大に向けた支援を継続させる必要がある。



図1 生産者と繁殖めす牛頭数の推移

- (2) 指宿子牛市場は隔月で開催されていることで、出品される子牛の斉一性が低く、県内の主要産地と比較して平均価格がやや安値で推移している。また子牛のセリ市出荷時の体高や1日当たり増体量（日齢体重、DG）も県内主要産地と比較して低く、子牛育成技術の改善が必要である。

新しい生産方式として畜産ICTの導入実証を行い、効果を検証し地域に波及させる必要がある。

- (3) 飼料価格の高騰が続く中、生産コスト低減と繁殖牛の繁殖成績向上を図るため、良質な自給粗飼料の生産性向上を図る必要がある。

3 活動の内容及び成果

- (1) 規模拡大支援
ア 規模拡大志向農家2戸に対し、制度資金等を活用した増頭計画作成と実践支援を行い、2戸で50頭の規模拡大を図ることができた。
イ 新規就農者1戸に対し、経営開始から5年間の経営開始・増頭計画の作成検討を行い、新規次世代事業を活用した牛舎整備と、繁殖牛30頭の導入を行い、経営開始に至る支援を行った。



写真1 新規就農者が新牛舎で経営開始

- ウ 生産者の経営管理能力向上のため、パソコン簿記記帳と記帳結果に基づく経営分析検討を実施し、記帳対象者全戸のカウンセリングとコンサルテーションを行ったほか、新規就農者1戸をパソコン簿記記帳に誘導した。

(2) 飼養管理技術の向上

ア 重点支援農家 27 戸に対して、子牛セリ市出荷データを分析し、子牛の商品性（発育状況、評価等）・生産性（母牛産次、出荷率等）の情報提供を行い、技術課題検討及び改善支援を行った。

イ 発育改善に向けた支援については、県肉振協作成の子牛育成マニュアルや人工哺育マニュアルを活用し、月 1 回の定期的な妊娠鑑定巡回を行うなど、関係機関一体となった支援を展開した。

重点対象者 27 戸の去勢子牛日増体量は（体重／日齢）1.10kg となり、市場平均 1.09kg より改善がみられた。また、子牛の飼養環境改善に取り組む生産者が増加した。

ウ 畜産 ICT の導入実証調査を行い、分娩監視による生産者の負担軽減が図られたほか、分娩事故の発生がなかった。また、行動監視による発情アラートにより、発情発見の効率化と、種付け回数の現象により、分娩間隔の短縮が図られた。



写真2 生産者と畜産ICTの実証検討

エ 粗飼料の生産向上へ向けて、嗜好性が高く高栄養が期待できる高糖分ソルガムの実証を行い、栄養価も高く収量も従来種と遜色ない実証結果が得られた。

4 今後の課題

(1) 生産基盤の維持拡大

規模拡大を指向する生産者・新規就農者の計画作成及び実践支援を継続する。

(2) 飼養管理技術の改善

子牛価格の下落と、資材高騰に伴い生産者の収益性の低下が見られているため、個別の生産者の詳細な飼養改善に取り組み、収益を確実に確保する活動を展開する。また、指宿市スマート農業推進協議会と連携し、畜産 ICT 技術の導入実証と地域への波及を図る。

(3) 自給飼料の生産性向上

飼料価格の高騰に対応するべく、自給飼料の生産向上につながる、効率的な作付け体系の確立に取り組む。



写真3 高糖分ソルガム2種（左）と普通種との草姿比較

5 担当した普及職員（○はチーフ）

○新川，江籠